

混沌の21世紀.....『深世海アクエリアン』の世界

「アビススフィア」ワールドへようこそ！

「アビススフィア」とは、『深世海アクエリアン～深淵のセイレーン～』の舞台となる、今から20年ほど未来の架空の時代、ゲーム世界の呼び名です。

訳語は、タイトルにもある「深世海」。

そう、このゲームは、人類にとっていまだ未知の領域の多い「深海の世界」を舞台にした、近未来の海洋冒険伝奇ゲームなのです。

この時代、人類は、深海に潜む「セイレーン」と呼ばれる正体不明の存在と戦争をしています。

あなたはセイレーンと戦う若者たちの一人となって、このゲームに参加するわけですが、どうして戦争なんかしているのか？ いったい21世紀に何が起こったのか？

いまはどんなことになっているのか？ 疑問は尽きないと思います。

もちろん、こういった舞台背景のことは知らなくてもそれほど問題なく遊べるのですが、ちょっと記憶の片断にとどめておくだけでも、ゲームをより楽しく遊ぶことができます。（ゲーム中の謎を解くヒントも隠されているかも知れません）

それでは、「アビススフィア」ワールドの基本となる舞台世界を、現代からの流れを追って紹介しましょう。

突然の訪問者

それは前触れもなく突然あらわれた。

西暦2000年2月。

新しいミレニアム（千年紀）の幕開けでもあった、20世紀最後の、世紀末の年。

巨大、と一言で言うにはバカバカしいほど超巨大な物体が、一夜にして東京上空に出現したのだ。

直径にして約10キロメートル。高さ約500メートル。半透明とも銀色とも目に映る円盤は、生き物のように激しく飛び回る無数の光球を中空の内部に踊らせ、いつの間にか静かに、空に浮かんでいた。

円盤.....そう、その薄いレンズ状のシャボン玉は、サイズさえ無視できるならば、我々の知識から判断するに「未確認飛行物体」、つまりUFOと呼ばれているものと思われた。

色とりどりに輝くUFOの姿は幻想的に美しく、神々しくさえあった。その巨大さゆえもあったが、人々が最初に目にしての感情は恐怖ではなく、ため息をもらすほどの圧倒的な感嘆だった。

それが単なる自然現象でないことは、内部の輝きのひとつひとつが、それぞれ異なる一定の明滅パターンを繰り返していることから、UFOが東京だけでなく、世界各地に同時に現れたことから明らかだった。

ワシントン、北京、ニューデリー、カイロ、ベルリン、リオデジャネイロ.....時を同じくして、世界の主要都市上空に居座ったのだ。何らかの、人類と接触する意図を持ってやってきたことは確実だ。

そして各国の防空システムはUFOに対してまったく

役に立たず、人類はこの日、この世で最も進化した生き物であるという誇りを捨て去る羽目になったのである。

『首都上空に未確認飛行物体出現す』

東京封鎖。東京ではその日のうちに非常事態宣言が発令され、23区内全域に戒厳令が敷かれた。

空を覆う不思議な発光現象がUFOの単なる一部だと知り、パニックに陥った1000万都民のほとんどは、我先に脱出を計り、騒ぎを大きくした。

パニックに陥ったのは、もちろん東京だけに限ったことでは無い。UFOがあらわれた都市はもとより、世界中で混乱や暴動騒ぎが多発した。

妄想だ見間違いだと一笑に付されてきたUFOが、いま、その存在をあらわにしたのだ。我々人類とは異なる知的生命との遭遇。人類史上初めての、大事件。UFOが存在したという事実を鑑みれば、これが初めてではないのかもしれないが、公に明らかとなった遭遇事件は、歴史的事件としては当然、初記録である。

UFOの出現は、人類にどう映ったか。

ある人々は世の終わりだと嘆き、生き地獄の苦難よりも安らかなる自らの死を選んだ。

ある人々は、神の千年王国の到来を告げる大いなる天のしるしだと喜び、救世主に祈りを捧げた。

UFOに対しての人類側の対応は、異常に素速かった。国連は「人類代表委員会」の設置を決定し、各国に対してUFOに対する一切の攻撃・接触を全面禁止する通達をおこない、また、優秀なスタッフをかき集めてUFOを分析、コンタクトをとるべきUFOを1機に絞り込み、膨大な機材や装備を調達し、3日後には東京に乗り込んでいた。

UFOと直接交渉を持つスタッフは、多くが天文学者や科学者の中から選ばれた。UFOの主の正体は明らかではなかったが、ETI.....地球外知性体、つまり異星人であるとの見方が主流だったからだ。

委員会の立場は基本的にSETI（地球外知性体探索計画）の「ポスト・デテクション・プロトコル（地球外知性体発見後の行動に関する議定書）」に準拠された。これは、国またはそれ以下の単位でのETIとの接触を禁止しており、世界人類に関わる問題を、一国家規模以下の責任において解決することを望まないとするものだ。しかし、あくまでも電波通信によるファーストコンタクトを想定し、なおかつ返信の意志決定権が人類側にあるということを前提にしたこの議定書では、ETIとの突然の直接接触という異常事態に対処できず、委員会は新たな議定書の採決を待たずに、UFOとの接触に臨まざるをえなかった。

一向に敵対意志を見せないUFOに対して、人類代表委員会は様々な接触方法を試みた。そして彼らは、ついにETIたちとの直接会見を果たしたのである。

この世紀の瞬間は、全世界に中継された。

誰もが固唾を飲んで見守る中、UFOの中で乱舞していた輝きの1つが、続いてそれに寄り添うように別の2



突如として東京上空に出現したU F O。それは天を覆うほどに巨大で、息をのむほどにも美しかった。

つの輝きが、ふうわりと路上に降り立ち、アスファルトを濡らした。あまりにもまばゆい輝きが、その中に潜む本体を隠す。

人間とそう変わらない大きさのヒューマノイド。

かろうじて判別できたのは、それぐらいだった。

「ようこそ、我々の星へ。人類を代表して、我々はあなたがたを歓迎します」

緊張したぎこちない身振りを添え、人類代表委員会はE T I に英語で話しかける。E T I は意味不明の言葉を数語発した後、流暢な日本語、つづけてフランス語で、返答をおこなった。(交渉担当者は日本人とフランス人であった)

その返答は若い女性の声のようで、妙なる調べのように心地よく我々の耳に響いたが、しかしその内容は、実に恐るべきものだった。

「我は最初にして最後のもの、崇められ、蔑まれしもの、売春婦にして聖なるもの、妻にして処女なるもの、石女(うまずめ)にして豊饒なるもの、鳥にして魚なるものなり。万物の母がしもべ、バルベロたる我が名において、いま全地に満ち、地の表を覆うリル=インドにも告げる。贖日の来たり。半日後にも炎の剣、天地を焦がし、死の翼、星を覆わん。汝等、滅ぶべし」

突然の最後通牒……。その内容は、宣戦布告と言ってもいいものだった。不思議なことに、この言葉を聞いた者すべてが、どうしようもない絶望感に不意に襲われたという。

あわてた交渉担当者が思わずE T I に詰め寄ったが、E T I のものと思われる歌声のようなものが聞こえた。たん、交渉担当者たちがその場にくずおれるように絶命、すると国連守備部隊がE T I に向かって、なんと発砲を始めた。銃声の合間にかすかに発砲中止命令が聞こえており、どうやら恐慌をきたした一部部隊兵たちが独断で発砲したらしい。

守備部隊のこの発砲により、E T I たちは負傷したらしく、その輝きが不意に弱まった。

しかし、この直後、上空のU F O が突然分解し始め、それはまったく信じられないことだったが……一瞬にして数億ガロンの水塊と化し、直下の東京を押し潰し、守備部隊もろとも押し流したのであった。

東京でのファーストコンタクトの顛末は全世界の人々に衝撃を与えた。国連はE T I を人類の敵に位置づけ、各国首脳はただちにU F O に対しての総攻撃を軍に命令、これを破壊しようとした。

しかし、人類のいかなる兵器も、U F O に対して無力であった。ファーストコンタクト事件からU F O の基本構造材が海水(!)であることが判明し、物理的損害を与えるのは非常に困難とわかった。インドではついにデリー上空のU F O に対して核攻撃がおこなわれたが、完全破壊にはいたらなかった。

E T I の予告した半日が過ぎ、一日が過ぎ……一週間が過ぎた。U F O は相変わらず主要都市の上空に君臨し続けていたが、予告されたような攻撃を開始する気配は無かった。また、こちらから攻撃をしかけても、U F O が反撃を行ったことは一例も報告されなかった。

人類代表委員会はE T I の正体究明に全力をそそぎ、E T I との接触前後の状況、あらゆる目撃報告、U F O の観察研究など様々な情報から、E T I を水棲生物と結論、ギリシア神話の海の怪物にちなんで「セイレーン」と名付けた。

また、U F O があるかぎり滅亡へのカウントダウンは続けられていると発言、国連議会での各国の合意をもとに結ばれた対E T I 国際軍事協定をさらに押し進め、E N O C H (エノク)と呼ばれる対セイレーン国連軍を設置、ついにここに人類は異種生命体との戦いの道を歩みだしたのである。

2001年2月19日……奈落の日

しかし人類は、セイレーンに対抗する手段を持ち得なかった。セイレーンの個体そのものは殺すことはできても、UFOを破壊することも追いつくこともできず、また、敵である彼らの所在も、正体も、彼らが「贖いの日」と呼んだ「半日後」のXデーが、我々の時間観念でいつにあたるのかすら、謎のままだった。

一方で、ENOCHによって対セイレーン戦略計画が次々と立案・実行に移され、戦闘準備が着々と整えられていった。

最初の接触からほぼ1年後。

一向に姿の見えぬ敵に、世間の人々は次第に、セイレーンに対する脅威を忘れはじめていた。

滅びの運命を悲観して自殺に走る人々も少なくなり、刹那的に横行していた凶悪犯罪や暴動も減った。攻撃を恐れて避難していた都市部近郊の住民も、住み慣れた我が家に戻りはじめていた。

この一年間、人々が最も熱狂したのは宗教だった。

人類以外の知的生命の存在。この命題に、あらゆる宗教はその価値観を変え、なんらかの形で教義の変革を迫られた。セイレーンを神として崇めるカルト宗教がブームを呼び、造物主から悪魔・妖精にいたるまで、あらゆる神格がセイレーンに付与された。

神話伝説においては、かつて人間は神とともに生きた時代があったが、この一年、人類は間違いなく神と共存していたのである。

そんな西暦2001年2月19日。

その日は盗人のようにやってきた。

どんよりとした雲塊が荒波のよううねり、世界中で地鳴りが発生した。天地の怒号のようだった。各国の観測所は地下の異常な電位変化を観測し、様々な怪光現象が目撃された。鳥や虫は姿を消し、魚や獣は狂ったように暴れた。

いつの間にか、天空を無数の光が乱舞していた。それはファーストコンタクトで垣間見た、セイレーンのあの輝きだった。

歌うような不思議な音が人々の耳にこだまし、人類はついにその日が来たことを知った。しかし、歌は人々の心に歓喜をもたらしたので、誰ひとり運命を呪ったり、悲しみの涙を流したりする者はなかった。

「事は成就せり」

誰もが熱狂し、セイレーンの歌に合わせて口ずさんだ。

「事は成就せり」

巨大UFOは激しく光り輝き、人々は圧倒的な天球の音楽と暖かな光に包まれ、経験したことのない無上の幸福感を感じていた。

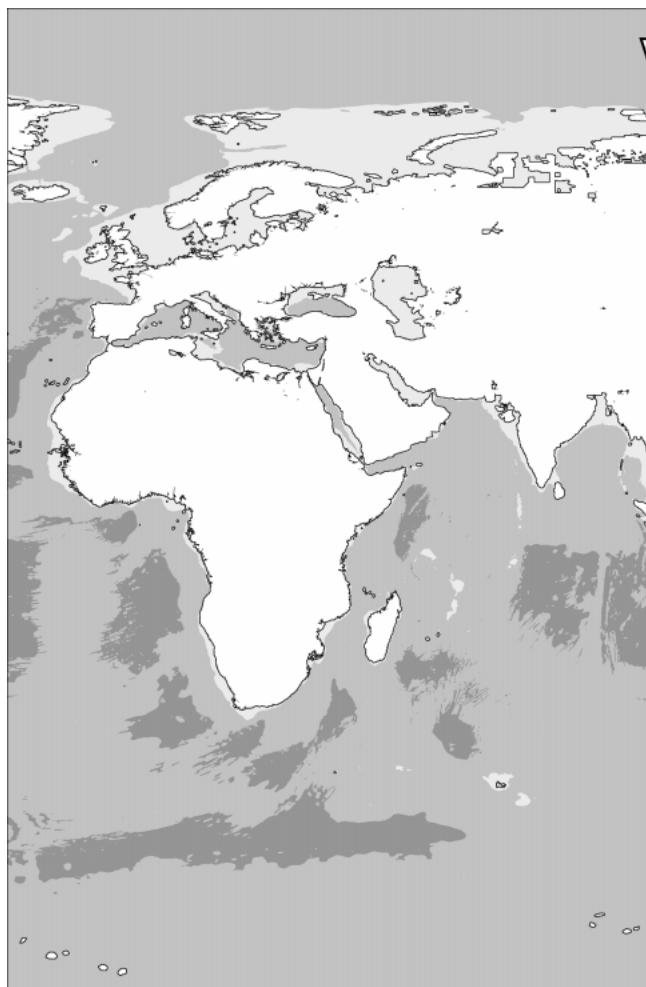
そのとき、誰もが確信した。

神の千年王国がついに到来するのだと。

大地は咆哮し、かつてないほどに激しく震えた。天河のような雷が奔り、天地を焦がした。

地は焼け爛れ、海は血に染まった。

星が落ち、地獄の淵が開いた。



2020年の地球。南極は万年氷が融解し、50mの海面

地の奥底から湧きおこった巨大なプラズマ雷はUFOを通じて網の目ようになって地上を駆け抜け、人々を原子の一粒まで焼き尽くした。

実際の時間としては、5分とかからなかったろう。

人類の50%がこうして死に至るのには、

死んだ者は幸いである。

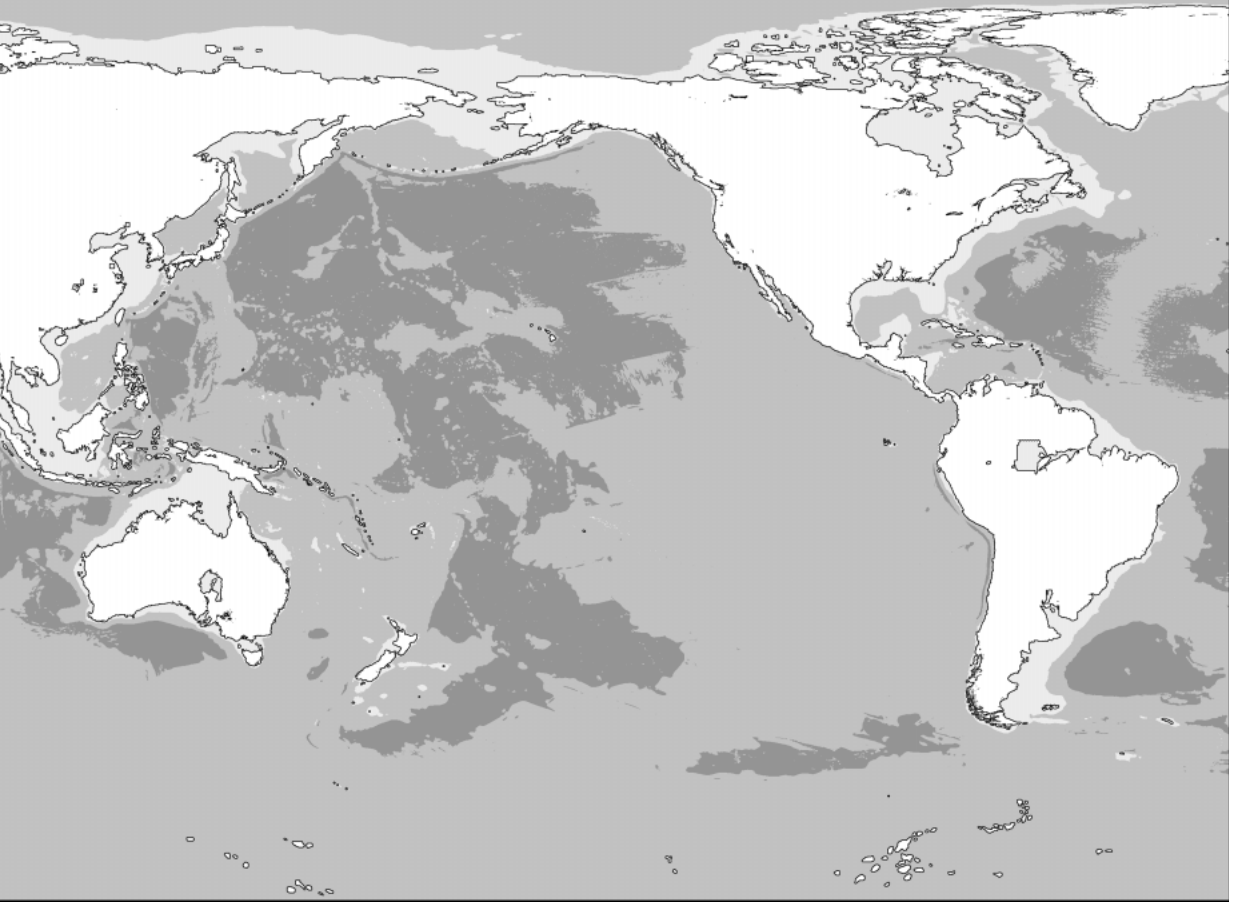
生き残った者のほとんどは、死者を羨むこととなった。残された者が体験したのは、まさにこの世の終わり、地獄そのものだった。

火山の噴火、大津波、地震、洪水……地球磁場の乱れによって、世界的規模であらゆる自然災害が突発的に発生した。

24時間以内に、残る25%が罹災死。続く異常気象や海面上昇、飢餓などによって15%が死亡。

わずか一週間のうちに、世界人口はわずか1割程度にまで激減してしまったのである。

WORLD CHART of the Present Day



上昇。南極大陸は海面下に没し、南北アメリカ大陸の大西洋岸やオーストラリア大陸では大きな内海が形成される。

破壊と再生の21世紀

「the Damned Day」……奈落の日。

21世紀、文字通り人類は、セイレーンによってそれまでの繁栄から、地獄に突き落とされたかのような苦しみを経験した。

わずかに生き残った人類……大陸の内奥部などで生活していた少数民族や、幸いにも被害を局部的に免れた人々を除けば、そのほとんどはENOCHによって世界各地のシェルターに保護された……。為政者、知識人、技術者、軍人、前途有望な若者や少年少女たち……人類文明を再建するために選ばれた者たちであった。

「奈落の日」の影響によって、世界地図は大きく変化していた。世界を焼き尽くしたプラズマ雷は極地方にも集中、両極圏の氷を蒸発させ、大気中にまき散らされた火山性噴出物は、爆発的に増大した水蒸気と結びつき、世界中に未曾有の豪雨を降らした。豪雨は数ヶ月にわたって降り続け、世界中を洪水となって洗い流し、海面を50メートルも上昇させた。これによって沿岸地域の都市部はほぼ水没。まさにノアの大洪水の再現となった。

また、多発したプレート性地震によって大規模な地面

の隆起や陥没、移動が起こった。地磁気の乱れは世界的な異常気象を呼び起こし、気候が不安定化。陸生の大型動物は半数以上の種が死に絶え、鳥に代わって羽虫の群が空を支配した。

21世紀の地球は、もはや我々の知っている星ではなくなっていた。

地球環境の激変は、世界情勢をも大きく変化させた。

UFOの直下にあった主要都市は、ほぼ完全に消失。直径数十キロメートル、深さ2キロメートルのクレーターとなって海底に消えた。

巨大な津波によって壊滅的な打撃を受け、大きな被害の出たヨーロッパ大西洋沿岸諸国は国体を維持できなくなり、経済復興と国家体制の確立のためにEUとロシアを中心に合体、連邦共和制となり、ユーロ・ロシア連邦 [Euro-Russian Federal Nations] を建国した。

経済的な理由でENOCHの再興計画から外されたアフリカ地域は、地理的被害は少なかった(あくまで他の地域と比べての話ではあるが)ものの、先進諸国からのODA(政府開発援助)をまったく受けられなくなり、そのため大規模な飢餓と疫病が発生し、一時的に人口が激



世界的な海面上昇は、ノアの大洪水の再来なのか。

滅してしまった。このため各国の国家体制は崩壊、食料や安全な生活圏を求めて各地で紛争が頻発したが、やがて武器弾薬の備蓄が尽きるとともに次第に沈静化、アフリカ最大の難問であった部族間紛争も自然消滅する形になった。やがてあらわれたひとりのカリスマ的指導者によって大統領制の単一国家体制が確立、大アフリカ共和国 [Republic of Great Africa] となった。

ヨーロッパと同様、津波によって甚大な被害を受けたアメリカは、東岸部一体がほぼ壊滅状態となり、西海岸もサンフランシスコを中心に大地震による被害を受けた。ENOCHの中心となって早くから対策を進めてきたアメリカは、広い国土と相まって被害こそ大きかったものの致命的な痛手を被るまでには至らず、現在は連邦政府をアトランタに遷し、復興を遂げつつある。

南アメリカも、主な経済圏であった北東部一帯が海没、海岸線が内陸の密林地帯にまで入り込み、人々は生活圏を失って、現在は流民もまばらとなり、ごく少数の高地民が生活を続けているだけとなった。

アジア地域では、インド内陸部や高原地域、高地系少数民族をのぞいてほぼ壊滅となった。もともと貧困層が大多数を占めていたこの地域では飢餓と疫病が深刻な問題化、副次災害でもっとも被害を受ける形になった。

中国は首都北京の消失が共産体制の土台を揺るがした。また、多発した内陸性の巨大地震と洪水・氾濫のため多くの人民が死亡、政治経済の中心地域が軒並み壊滅し、いまだ復興は遠い状況にある。

他のアジア地域に比べれば、日本はかなりマシな状況であった。ファーストコンタクトで首都機能を失い、一時的に国政はマヒしたものの、UFOが崩壊したおかげでENOCHの対セイレーン戦略研究が主に日本で進められることになり、また結果的に壊滅的な破壊をまぬがれることができ、先進国の中ではかなり被害が少なかった。関東地方をはじめとする平野部は大部分が海没してしまい、現在の首都は長野の松代に遷されている。

オセアニア地域では、海面上昇によってほぼすべての地域が海没。規模の小さな島嶼国家はすべてが無くなった。オーストラリアも沿岸部や一部内陸地域が海没してしまっている。

ENOCHの計画再生により、人類文明はかろうじて滅亡の危機を脱することができた。

再興計画は、実体に最適な社会構成がすすめられ、政治・経済をふくめ、小規模になったぶんかえって効率的に機能するようになり、急ピッチで復興していった。

激変した地上にくらべ、環境の比較的安定していた海洋に食料・産業資源を求め、海洋開発も進められた。

だが、ふたたびセイレーンからあのような攻撃を受けたとすれば、今度は間違いなく人類は滅び去ってしまうであろう。しかし、「奈落の日」以降、セイレーンはその姿を人類の前にほとんどあらわすことはなかった。

セイレーンは何処へ行ってしまったのか？

人々が平穏を取り戻し、文明の再建の道を歩み始めた時、ENOCHの進めていた、ネレイド計画(セイレーンおよび海洋底探査計画)をはじめとする一連の海洋開発計画によって、推測通り、彼らが深海を生存圏とする生命体であることが確認された。

セイレーンは幾度となく、これらの海洋調査活動を妨害したり、洋上艦隊を攻撃した。これらの攻撃は常にセイレーンの一方的な勝利に終わっていたが、しかしなぜかセイレーンは、人類に対して「奈落の日」のようなカストロフ的な攻撃を加える様子ではなかった。

人類を滅ぼそうとしたセイレーンの真なる目的は一体何だったのか。ともかくにも、このセイレーンの不可解な戦略の間隙をぬって、人類は文明の再建とセイレーンへの攻撃準備を着々と進めていったのである。

国際平和組織ガイアピラス

ENOCHとは別に、この新世紀に台頭してきた組織があった。その名を、ガイアピラスという。

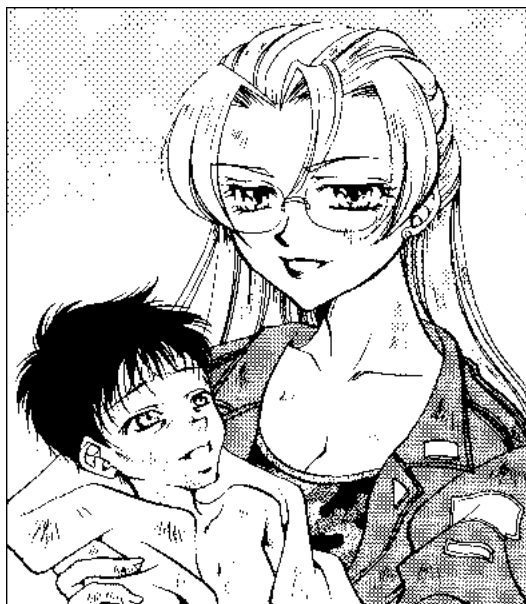
NGO(非国家主体になる民間公益組織)。ガイアピラスは1970年代に発足した環境NGOである。反核運動や捕鯨禁止運動で求心力を集めて急成長を遂げ、ある時機をきっかけになりふりかまわない強硬路線をたどりはじめ、圧力団体としての性格を強めていき、90年代には、非国家主体とはいえその組織力や国際舞台における影響力は、先進国にも匹敵するものになっていた。

「奈落の日」に前後して、ガイアピラスは莫大な資産を投じて世界各地で精力的に救民活動を展開、「奈落の日」以降も数多くの罹災者たちの生命を救い、圧倒的支持を受けるようになった。

創設者クリスティー・マクマーリンの亡き後、まだ少女といってもいい年頃の愛娘・エヴァンジェリンがガイアピラス総帥に就任、エヴァンジェリン体制下のガイアピラスは、先代をも上回る彼女のカリスマ性と、辣腕ぶりで政治力を発揮するようになった。各国の政治家にもガイアピラスのメンバーが少なからず名を連ねるようになり、すべての国体が20世紀に比べて弱体化しているこの時代、ガイアピラスは経済・流通・情報・文化といった復興の遅れている分野を独占し、以前にも増して影響力を強め、いまや国際政治のフィクサーとしての力を持ち始めている。

また最近では、救民たちの自衛戦力と称して武装戦力をも持ち始め、最初は彼らの活動を歓迎していたENOCHも、今では逆にガイアピラスを危険視するようになった。

そして、それはいまや単なる危惧ではなくなりつつあった……。



自ら陣頭に立ち救民活動を行う、ガイアピラス総帥。

「ブルーアーク」誕生。そして超深海へ……

セイレーンは人類を滅ぼさんとした、不倶戴天の敵である。セイレーンが地球にいる限り、人類の繁栄はあり得ない。ENOCHはファーストコンタクト以降、セイレーンに対しての様々な準備をおこなってきた。いや、UFOが実在したという事実を鑑みれば、それはおそらく第二次世界大戦後まもなくの1947年に起きた、「空飛ぶ円盤」が命名されたケネス・アーノルド事件や、1952年のワシントン上空UFO乱舞事件あたりにさかのぼれるのかも知れない。セイレーンとのコンタクト、「奈落の日」までの対応の速さ、21世紀以降の着実な文明再建……突然の出来事にしてはこれらの対処が実に手際よく行われたことを考えると、UFOという存在を世間にはひた隠しにし、実はその裏で何らかの知的生命の存在を認め、このような事態もあらかじめ予測し、ひそかに対

策研究が続けられて来たのではないかと考えられなくもなかった。

そして21世紀。ENOCHは対セイレーン戦略計画「ニムロド計画」を発動、セイレーンの潜む超深海を攻略可能な、まったく新たな戦略構想の下で新兵器の開発を進めたのだった。

それは、ヘルダイヴァーと呼ばれる人型の潜水戦闘兵器と、その母艦となる巨大潜閘（潜水）母艦である。どちらもこれまで人類の深海進出を阻んできた最大の障壁「水圧」を克服し、高度で自在な三次元戦闘能力を有する超兵器となった。

ENOCHはこれらの新兵器をセイレーン攻略の主力として超深海潜閘艦隊「ブルーアーク」を編成、ついにセイレーンに対して反撃の狼煙を上げたのである。南大西洋にて公試中だった潜閘母艦はセイレーンと交戦、初陣を飾って奇しくも新兵器の有用性を実証、人類の士気を大いに盛り上げたのだった。

ブルーアークは現在、日本の沖横須賀島（旧房総半島）に前線基地を置き、艦隊旗艦「蒼穹」を配備、セイレーンを海から一掃すべく潜閘準備を固めつつある。

沖横須賀島の潜閘術科訓練校の生徒たちもダイヴァー（ヘルダイヴァーの搭乗員）としての訓練を重ね、人類の命運を賭けた戦いに赴かんとしている。

しかし、敵はセイレーンだけではない。

ガイアピラスは、人類を一瞬で滅ぼせるほどの力を持ったセイレーンと戦う愚かさを強調、「奈落の日」以降は生き残った人類に対して掃討戦がおこなわれないことを理由に、セイレーンと人類の共存の道があると主張し、ブルーアークの存在を否定し、その戦闘行為を妨害する宣言をおこなった。狂信的とも思えるこの人類への裏切り行為は、しかし彼らの庇護のもとでつかの間の平穏を享受してきた人々には、熱狂的に受け入れられた。

ガイアピラスは規模こそ小さいものの、ブルーアークの制式採用機に劣らない優秀なヘルダイヴァーを配備しており、その戦力は決して無視できるものではない。セイレーンと同じくらいに危険な存在だ。

人類とセイレーン。

深海を舞台に、最初で最後の死闘がいま、繰り広げられようとしていた。

母なる海が受け入れるのは、はたしてどちらなのだろうか……？

……いかがでしたか？ このゲームがどんな背景を持つのか、少しは理解できましたでしょうか？

憶えておく必要はありません。「アビススフィア」ワールドに生きるキャラクターにとって、大事なのは、過去ではなく自分が成すべき未来なのです。

それではここを出発点として、自分の未来を勝ち取る冒険に旅立とうではありませんか！